

ドイツにおける国家的共同体・宗教的共同体

— 相互関係と発展 —

/ Staats- und Religionsgemeinschaften - ihre Beziehungen und Entwicklung in Deutschland

D. エーラーズ教授 (法学博士・ミュンスター大学、ドイツ国法学者協会元理事長)
/ Prof. Dr. Dr. h.c. D. Ehlers (Westfälische Wilhelms-Universität Münster,
Ex-Vorsitzender der Vereinigung der Deutschen Staatsrechtslehrer)

中央大学名誉博士号授与・記念講演 (08/05/2014)要旨

ヨーロッパ史を振り返るならば、国家的共同体・宗教的共同体の相互関係については、①双方の結合、②双方の統一体の厳格な分離、または、③双方の分離から出発するものの、相互協働を排除しない、中間モデルが指摘される。講演では、同時に協同が認められるとはいえ、あくまでも分離を原則とする中間モデルが、ドイツにおいて際立って現れたものとして、中世、宗教改革時代、第一次世界大戦、ワイマール共和制、ボン・ベルリン共和国に至るまで、簡潔に跡づけられる。分離および中立性は、国教会の禁止、信仰・良心の自由の保障、消極的な宗教の自由保障等によって、自由保障の現実化に基礎が求められる、双方の協働は、教会税の徴収、公立の宗派学校、大学神学部、日曜日保護、刑事施設における霊魂救済等によって、各々象徴される。このモデルは近年、「世俗化」・「多元化」という、現代的テーマに直面している。人間が、積極的な宗教の自由を行使しなくなればなるほど、市民が、国家による施設において、消極的な宗教の自由を援用することが頻繁になるほど、そして国家が、平等取扱いという難問に度々直面させられるほど、教会との協働または教会への助成を制限する傾向は、それだけ一層、強まる。傾向的には、国家と教会の協同の程度は、恐らくは後退することになるだろう。